
二百文字未満小説十点セット その2

阿波野治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二百文字未満小説十点セット その2

【Nコード】

N4775N

【作者名】

阿波野治

【あらすじ】

第二弾です。夏っぱい作品を集めてみました。おまけもあります。

<猛暑日>

彼女と扇風機の前でダラダラしていた時だった。唇を閉じた状態から口腔に溜まった空気を外に出そうとしたら、思いがけず放屁音のような音が出た。すると彼女がここぞとばかりに話しかけてきた。「もう、下品。やめてよねー」

「いや、これは……」

「誤魔化さないでよ。ちゃんと聞こえてたんだからね。そういうのは私の前ではやめてくれない」

クソ暑いというのに鬱陶しい。コンクリ詰めにして海に沈めてやろうかと思った。

<賞賛>

高校野球に興味はないが、母校が甲子園に出たので、テレビ観戦することにした。

序盤から一方的な試合展開だった。押されているのは母校の方である。相手は優勝候補らしい。序盤で大差がついた。大勢は決したが情性で観戦を続けた。結局母校は二十対零で初戦敗退した。酷い試合だった。

試合後、母校の選手に観客から拍手が送られた。土を集める選手の中に泣いている者はいない。

醜態晒して賞賛を貰えるなら、俺も野球を始めようか。

<アイスクリーム>

公園のベンチで小学生の姉妹がアイスを食べている。姉はカップアイス、妹は棒アイスである。

妹の棒アイスという選択は誤りだったらしい。気温が高いせいでアイスが溶け、棒を持つ手に落ちてしまうのだ。食べる分より溶けた分量の方が多いほどである。

すると姉が自分のアイスを差し出した。妹は最初遠慮していたが、やがて棒アイスをゴミ箱に捨て、カップアイスを黙々と食べた。姉はただ微笑してその横顔を眺めていた。

<眼福>

花火大会に来たのは間違いだった。暑いし、混んでいるし、肝心の花火は二分見ただけで飽きた。けれども人混みの中だから身動きがとれない。来年は絶対に来るものかと思う。

何気なく横を向くと、若い女が上空を仰いでいる。開いた胸元からは見事な巨乳が垣間見えていた。花火などより余程目の保養になる。相手は花火に夢中だから咎められる心配もない。俺は花火が終わるまでその乳を目で堪能した。

来年も行ってみるかな、花火大会。

<西瓜割り>

去年西瓜割りをした時、西瓜を叩いてもヒビ一つ入れられなかった。それは己の肉体の貧弱さに劣等感を持つ僕には忘れがたい事件だった。だから今年は絶対にリベンジするつもりだった。

友達の声に導かれて西瓜の前まで来た。僕は遮二無二棒を振り下ろした。手応えがあつたが割れた確証はない。尚も振り下ろし続けていると、なぜか友達が止めに入った。

目隠しを外すと、首から下を砂浜に埋めた友人の一人が、頭を割られて死んでいる。

<バーベキューパーティー>

友人宅でBBQパーティーが催されたというのに、メタボで食意地の張つた森の姿がない。

「森が欠席とは珍しいな」

隣の筧に話しかける。

「ああ。でもあいつウゼえし、来なくてよかったんじゃね」

「美味しい肉なのに、勿体ない」

「まあ、肉が美味しいのは同感だな」

肉は脂身が多いが、旨味が濃厚で美味だ。これを食べないとは太田も運が悪い。

しかしこの肉、何肉なんだろう。味からして高い肉だと思うのだが、その割に沢山あるし……。

<真夏の果実>

浜辺の果樹園で果実を探していた。果実は概ね美しかったが、実がどれも小さい。花より団子が欲しい。豊満な肉を多分につけた果実が。

漸く賞味するに価する果実を見つけた。岩陰に誘い、外皮を剥がしにかかる。果実は拒絶しない。全てを取り去る。

果実の中身は見た目より驚くほど少なく、色も黒ずんでいた。旬の過ぎた果実である。これでは食べられない。

苛立ちまぎれに果肉を握り潰すと、果実は上面だけの甘い声を洩らした。

<苛立ちの根源>

隣室の風鈴が五月蠅い。風鈴の音のどこがいいのか。もう限界だ。ついに隣室の住人に直談判した。すると住人は、その程度の音を気にする方が異常だと言った。私はついカッとなって、住人を殴り殺してしまった。汗だくになりながら死体を隠し、自宅に戻った。クーラーの冷氣にあたっていると、風鈴の音など全く気にならないことに気づく。

なぜ普段から冷房をつけていなかったのだろうか。そうしていれば殺人を犯さずに済んだのに。

< 出来ない戦 >

重労働をしたから喉が乾いたし、腹も減った。冷蔵庫を開けてみるが、さっき殺した恋人の死体が押し込められているだけで、水一つない。食料を買いに行こうにもシャツは多量の返り血を浴びている。ここは恋人の家だから服の替えもない。

仕方がないから僕は、カツ丼を食べに近所の交番に赴くことにした。

< 抹殺 >

日本人を殺せ――。

大陸に暮らすとある男が、ある日そんな天の声を聞いた。それは強迫観念となって男を圧迫した。

幸か不幸か、男の周囲に日本人は一人もいなかった。だが天の声はそんな事情を一切無視し、男を恫喝し続ける。

煩悶の末、男は首を吊って自殺した。

男は、日本人だったのである。

おまけ

< 夏目 >

小便をしにトイレに入ると、風が入ってくる影響で、そこが存外

涼しいことに気づいた。冷房なき我が家で最も快適に過ごせる空間かもしれない。

暫し涼んでからトイレを出ると、彼女がここぞとばかりに話しかけてきた。

「なに長々とウンコしてるのよ。やめてよねー」

「いや、これは……」

「臭いが残るから嫌なのよ。今度から大をする時は外でしてよね」
クソ暑いというのに小五月蠅い。全裸に剥いて山中に放置してやるうかと思った。

<真夏日>

真夏日にもなると、洗い物をすることでさえ涼をとることに等しい。つい水を目一杯出して皿洗いをしていたら、ズボンを濡らしてしまった。それを認めた彼女がここぞとばかりに話かけてきた。

「何でお漏らしなんかするわけ？ やめてよねー」

「いや、これは……」

「早く着替えてきてよ。子供じゃあるまいし、二度とそんなバカなことしないでよね」

クソ暑いというのに煩わしい。バラバラに切り刻んで豚の餌にしてやるうかと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4775n/>

二百文字未満小説十点セット その2

2010年10月28日04時10分発行